

「よし、今夜行くことにしよう」

そう決意したのは日没後のことだった。西の空がオレンジから濃紺の美しいグラデーションに染まっていた。今日は空の透明度が高い。天気も明日いっぱい晴れの予報だ。片付けたい仕事はあったが、珍しく残業せずに職場を後にした。目指す場所は、奈良県と和歌山県の県境を走る高野龍神スカイライン。空海が拓いた高野山から南へ延びる自動車道で、関西では天体写真の撮影スポットとして有名なところである。標高は1000mを越え、一皮むけたようなクリアな星空が期待できる。明日は平日の休み、月明かりの影響はなく、天気も最高、三拍子揃ったタイミングはめったにやっこない。とはいえ自宅からは車で3時間少しかかる遠征になるし、最近疲れ気味なのも気になる。急に思いついたことなので仲間も誘えない。したがって、かなり気合を入れて決断する必要があったのである。

自宅へ帰ると一人で星見に行くことを妻に告げる。心配顔ながら受け入れてくれるのありがたい。夕食を手早く済ませると防寒具や観測機材などを車に積みこんだ。そして、車に手をかけて心の中で「たのむぞ」と声をかけて出発する。いつもの儀式である。一人で夜、山の中へ車を走らせるときは万一のトラブルが一番怖い。幸い今まで無事に帰ってこられたのは、このおまじないのおかげだと信じている。

私の職場は某科学館。プラネタリウムの運営が主な担当業務のいわゆる「プラネタリアン」である。あまり世間には知られていないが、この業界ではプラネタリウム担当者をこう呼ぶことがある。最初はエイリアンの親戚みたいで違和感があったのだが、今ではそう悪くないと思っている。

最近のプラネタリウムはずいぶん変わってきた。ビデオプロジェクターやコンピュータの進化によりドームスクリーンに迫力あるCGを映し出すことが容易にできるようになってきたため、どこのプラネタリウムでもこれでもかと言わんばかりに映像が登場する。CG主体になってきたせいかプラネタリウム番組を制作する業者も増えてクオリティもずいぶん上がってきた。これも時代の流れだろう。しかし、旧型のプラネタリアンとしてはだまって映像を流すというよりも、満天の星空の下でじっくりと語って聞かせたいというのが本音だ。そのためには自分自身が実際の星空やさまざまな天文現象を見て豊かな感性を育むことが何より大切だと思う。自分の感じたことを自分の言葉で語ってこそ、聞く人の心に響くのではないだろうか。今回、一人での遠征を

決断したのも満天の星空の感触を忘れかけていたからである。

車は市街地を通る国道からそれて、ようやく高野山を登る道に差しかかった。道が狭くなり大きく曲がるカーブの連続になる。6速マニュアルトランスミッションの2速、3速を多用しながらリズムカルにコーナーを抜ければ、両手両足の動きと車の挙動、そして心の高まりが一体となる。この心地よさはオートマチックでは得られない。プラネタリウムでもマニュアル操作、生解説で客席と一体感が生まれたときはなんともいえない。だから、車もプラネタリウムもマニュアルが好きなのだ。そんな他愛のないことを思いながら久しぶりにワインディングロードを駆け抜ける喜びを存分に味わったころ、道が広がって高野龍神スカイラインに入った。星空の状態がとても気になるが、ヘッドライトの明るさにじゃまされてフロントガラス越しにはよくわからない。あまり気にしすぎて何度か溝にはまりそうになったが、ようやく観測地に到着した。平日だからか誰もいない。期待に胸を膨らませて車を止める。ライトを消しエンジンを切って…一気に外へ出た。

「うおおっ」思わず声が漏れる。空が暗い！星の数が多い！頭上近くのカシオペヤから東西に伸びる天の川がはっきりとわかる！西の地平線に沈みかける夏の大三角と東の地平線から昇りたてのオリオン座がとても大きく見える。プラネタリウムではドームの中心にある投影機から見たとき星座が正しい大きさに見えるように作られているため、ドームの端から反対側を見ると星座がかなり小さく感じてしまうのである。

しばらく本物の星空の迫力に圧倒されていたが、やがて寒いことに気がついた。11月に入れば、山の上では0℃前後まで気温が下がる。持ってきた防寒具を着込んだあと、観測機材などを車から降ろしていった。荷物を取り出しながら、しみじみ来てよかったと思った。出かけるときに抱いた恐怖や不安はすっかり消えていて、不思議なことに星空というか宇宙に歓迎されているように感じた。風がほとんどないことも手伝って、ふんわりやさしく宇宙に包まれたようだった。こんな感覚は初めてだ。

必要な道具を出し終えて準備が完了した。まずは、背もたれが大きく倒れるお気に入りのスターウォッチングチェアに腰をおろし星空を見上げてみる。一つ一つ星座の並びを確認すると普段しゃべりなれた神話が思い起こされる。一通りメジャーな星座をながめた後、ふと思出したのが「プレアデスの両手」だった。すばる—すなわちプレアデス星団から両側に伸びる星の列を巨大な二本の手に見立てた古代アラビアの星座である。プレアデスから伸びる右手はひじがペルセウス座で、手がカシオペヤ座。左手はひじがくじら座の鼻の星メンカルで、手の先がくじら座の

尾の星デネブ・カイトス。何れもプレアデスから絶妙なカーブで長く伸びている。プレアデスに脚を向けて背もたれを倒すと大きな手でつかみかかられるような錯覚に襲われた。プラネタリウムでは気づかなかったが、肉眼の視野の限界に近い広がりだった。怖いほどの迫力である。そうか！きっとアラビア人もこんなふう感じたに違いない！まるで時空を越えて過去に実在した人と気持ちがシンクロしているかのようだった。ひょっとしたら、こんな心の動きが宇宙のどこかに記憶されていて、その情報が未来の人間に伝わるのかもしれないと思った。星座に神秘的なパワーがあるように思えるのは、長い歴史の中で積み重ねられてきた人々の想いがそうさせるのだろうか。

ひととき余韻を味わった後、今度は双眼鏡・望遠鏡でさまざまな天体をのぞいてみることにした。銀の砂をまいたような天の川。星の生まれる場所ー散光星雲。若い星の集まりー散開星団。星の死ー超新星爆発の残骸。メジャーな天体は学生時代から何度も見ているので星の地図など見なくても次々に導入できる。それぞれの天体の特徴も驚くほど覚えていた。最近は何れも物忘れが多くなってきているだけに妙に気分がいい。調子に乗って現代天文学が教えてくれる天体の情報を思い出しながら、レンズ越しの天体のイメージと結び付けてみた。時には妄想が暴走し、つい笑ってしまうこともあった。思わず我に返ってまわりを見渡したが誰もいないのでひと安心。もし、幽霊が近くにいたら、危ないやつと思って離れていっただろう。それはともかく、こんなに条件の良い場所でじっくりと天体観察をしたのは久しぶりだった。

どれくらい時間が経っただろう。気がつくオリオンをはじめとする冬の星座が天頂付近にやってくる。ここでちょっと一休み。サーモステンレスボトルからマグカップに熱いコーヒーを注ぎ入れる。星空をながめながらチョコレートをほおばりコーヒーを飲む。少し冷えたからでも温まり、実に気分がいい。心もからだもいやされ、(缶コーヒーのCMではないが) つくづく幸せで贅沢な時間だと思う。ゆっくり呼吸すれば、五感が鋭くなる。すばらしい星空の景色が視覚だけでなくその他の感覚と共に脳へ記憶されるような気がした。この瞬間が二度とないと思うと、おじさんには似合わないがなんだか急にセンチメンタルになった。

そんなとき「あぁ～」と声をあげてしまった。客観的にはキモイ。幽霊がいたら再び遠ざけたに違いない。思わず声が出たのはとても印象的な流星が見えたからである。オリオン座リゲルの上からおおいぬ座シリウスの方へオレンジ色の火の玉のようなものが煙をともなってゆっくり飛び、最後は爆発するように明るくなって消えたのだ。その明るさは全天一の輝星シリウスを軽く上回っていた。こういう明るい流星は特に火球と呼ばれているが、なかなかお目にかかれない。私は流星に言葉を贈った。「長い間お疲れさま。キミの最期はボクが見届けてあげたよ」と。ル

一つをたどれば私のからだを構成する物質も流星の粒も 46 億年前は原始太陽のまわりをまわる同志だったのである。流星の粒は長い長い旅を終えて、地球大気に突入し華々しくその生涯を終えた。やがて目に見えない微粒子となって地上に降ってきて、誰かのからだに取り込まれるかもしれない。私たちは宇宙とつながっているのだ！

一人で星空をながめているといろんなものに語りかけたくなる。古代の人々が万物に精霊が宿ると考えたことに今は素直に共感できる。

この想いは意味のないことなのだろうか？

私たちの意識とはいったい何なのだろうか？

私たち人間をつくる元素は、輝く星の中で作られ、星の死と共に宇宙に放出されたものである。科学者は宇宙の始まりから現在に至るまでの物質の変遷を大筋で明らかにしてきた。だが、生命の発生や私たちの意識の本質は科学ではほとんど解明されていない。それでもそれらがこの宇宙に存在していることは確かである。物質だけでなく生命や意識を含めて宇宙なのだ！宇宙の解明の鍵はそこに隠されているのかもしれない。それを知ることによって私たちはどう生きるべきかがわかってくるのではないだろうか。ふだんの自分ではない思考が脳を駆け巡る。

カップの底に残ったコーヒーがすっかり冷えているのに気づいたとき、プラネタリウムで語りたい何かを星空からもらった気がした。